

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 イソップに学ぶ昔話研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花部, 英雄, Hanabe, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000632

イソップに学ぶ昔話研究

花部英雄

いま私は岩手県北上市にいて、この原稿を書いている。昨年(2020年)の三月の春休みに妻の実家に来ていたが、コロナの緊急事態宣言によつて、そのまま避難民になってしまった。親切な援助者によつて何とかズームでの授業はこなしているが、傍から見ると塾居生活そのものである。いろいろストレスもあるが、気晴らしの読書は嬉しい。その一つにイソップがあり、そのことを書いてみたい。

イソップ寓話は専門の昔話研究には不可欠なものではあるが、仮名草子の『伊曾保物語』以上には研究してこなかった。このたびの災禍で、「イソップ寓話集」やそれに触れた研究書などを読む機会があり、改めて昔話の研究に有益であることに気づかされた。イソップは紀元前の人で、ギリシア領サモス島で奴隸として雇われていたという。そのイソップの語りが基となって稿本が作られ、やがてヨーロッパに渡つて写本や印刷本が登場して、世界中に広がり愛好されるようになる。日本には早くギリシタンの伝来とともに入つてきて印刷されて読まれてきた。

日本の昔話研究の先駆者である柳田國男は、日本の昔話の淵源を神話に求め、動物の昔話を完形昔話(本格昔話)の派生としてとらえた(雑誌『昔話研究』『昔話覚書』)。しかし、イソップの寓話は、「物言わぬ動物たち」の主人公に物を言わせた社会派寓話で、紀元前五、六世紀にまで遡る。このことは、日本の昔話の歴史を考える上で看過することができず、これまでの通説を大きく修正する必要に迫られてくる。

関敬吾『日本昔話大成』の昔話話型に「親捨山」というものがある。四つのサブタイプがあり、そのうち「難題型」というのは、早く『枕草子』『今昔物語集』に載る。七十になった老人は棄てなければならないが、親孝行の息子は棄

てずに隠しておく。隣国から課された難題をその親の知恵で解決し、褒美とともに棄老の習いは無くなる。インドの『雑蔵宝経』が典拠とされるが、しかし、その物語構成はイソップ研究者の権威のベン・エドウィン・ペリーによると紀元一世紀前後に作られた「イソップ伝」にもすでにあるという。

バビロンのリュクルゴス王の宰相となったイソップは、讒言ざんげんによって死刑となるが、執行役の將軍が匿かくまう。エジプト王から「空中の高塔」の難題を課されて、困り果てたりュクルゴス王に將軍はイソップが生きていることを告げ、難題を無事に解決して攻められることを防いだ。

ところで、この話はさらに遡る。紀元前八世紀のアッシリア王国のトビトの甥の「アヒカル物語」にある。中務哲郎『イソップ寓話の世界』（ちくま新書、一九九六）によれば、ナイル川の周辺で発見された前五世紀後半のアラム語パピルスにあるというが、物語の成立はもつと古いとされる。しかし、そうした知識に乏しい者が誤って解説することになるかもしれないのでそれは擱おくことにする。

さて、イソップの場合は、四羽の鷺に子どもを乗せる訓練を施した上で、エジプトの王の元に出かけていく。そして、王の前で鷺に乗った子どもを舞い上がらせ、空中から「泥と煉瓦と材木と、それに道具を渡しておくれ」と叫ばせたという。これは日本の一休の「屏風の虎退治」と同様である。

再び、日本の昔話に戻ると、イソップ寓話の話型は日本でいう動物昔話と笑話に分類される内容がほとんどである。柳田はいずれも派生昔話としたために、古くある日本の昔話モチーフは神の子の活躍と、シリアスな信仰にもとづくものということになる。しかし、イソップ寓話を見ると、そうしたものは大きく違って、物言わぬ動物を通した人間の社会生活が中心である。この落差をどのように補正、是正していくかが今後の昔話研究の焦点でもある。その問題意識をもとに、イソップ寓話における戦争を話題に「鳥獣合戦」を物した。その出来栄えはともかく、昔話の国際比較は現代のテーマであることを確認している。コロナ同様日本の昔話の世界に閉じこもってはいけな時代になったようだ。